

「二刀流の輝き」

ローマ10章13～15節

今朝、みなさんと共に礼拝を守る事が許され、大変嬉しく、心から感謝いたします。山口譲と申します。この3月まで東京・世田谷区にあります下北沢聖書教会で奉仕しておりました。4月から東南アジアはタイ・バンコクにある教会で奉仕するように導かれています。タイ・バンコクでの奉仕と言いましたが、実はこれで3度目の奉仕になります。

「よほどタイが好きなのか」と言われそうです。しかし土浦の教会に来た時には、この事はどうしても言わなければなりません。当時、私達の教団ではインドネシアとタイに宣教師を派遣する計画でした。それで私がインドネシアに行くと思われていました。実際、状況を知る為に10日間ほどインドネシアを訪ねました。その時、お世話下さった宣教師の先生とは、徹夜で国外宣教を議論しました。随分迷惑だったと思います。しかし只々私がインドネシアに来ると言う期待から、グッとこらえて付き合っていました。

それなのに、ああそれなのに、山口はインドネシアではなくタイに行きました。あの時の忍耐と寛容は何だったのか。私は「あの裏切り者め」と後ろ指をさされるタイ宣教師となりました。主の導きには、実にそういう事があるものです。

あれから40年。本当に今年でちょうど40年です。裏切り者は裏切り者なりに、主の導きに従って、精一杯、3度目のタイ奉仕に向かおうとしています。それが「裏切り者」と呼びながら、本当に温かなまなざしを向けて支えて下さる元インドネシア宣教師（清野先生）への誠実だと考えています。

そのように最初の奉仕は1985年から14年間、タイの教会をメインに、そして日本語教会での奉仕をサブとしたものでした。その間、土浦めぐみ教会の皆さんには、祈りにおいては勿論の事、具体的に、人材的にも経済的にも、言葉で表せないほどの多大な支援を頂きました。皆さんの中には「私も奉仕しました」と言われる方もいらっしゃると思います。

その結果、現在マハポーン・サンスーン教会という教会が建っています。日本語にすると、大祝福・賛美教会となります。わずか一握りほどのメンバーしかいない小さな教会です。それでいて大祝福・賛美教会とはあまりに大胆な名前です。いったいどんな教会だろうと思うかも知れません。この教会はバンコクの片隅にある小さなスラムの教会です。バンコクの道路には大抵名前がついていまして、役所が名前を書いた看板を立てています。ある時、スラムの入り口となる通りに新しい看板が立ちました。そこには「ソイ・ローソ」と書かれていました。「ソイ」は小路と言う意味なのですが、「ローソ」が分かりません。手元のタイ語の辞書を取り出しましたが、どこも「ローソ」がありません。そこで教会の青年に「新しい看板に『ローソ』とあった

けど、あれどういう意味？」と聞いてみました。すると少し嫌な顔をしながら「あれはタイ語じゃないよ。英語だよ」。そう言われて気づきました。看板の「ローソ」は「ハイソ」の反対なのです。ハイソサイエティ上流階級・富裕層の反対。本当のところ、ローソサイエティなどという英語があるかどうか知りませんが、いわゆる下層民・貧民/しもじも、と言うような意味で「ローソ」。そのように役所が道路に「ソイ・ローソ」「下層民小路」という名前を付けて、その看板まで建てたのです。小さなスラムですが、それほどの被差別地域です。その彼らの教会ができた時、マハポー・サンズン 教会/大祝福賛美教会と、自分達で名前をつけました。被差別地域にありながら、教会にこんな大胆な名前を付けるなんて、彼らの気骨を感じるではないでしょうか。

勿論、これは負け犬の遠吠えのような、口先だけ大きな事を言うのではありません。始まって、かれこれ35年ほど経ちますが、教会の祈りと奨学金によって大学を出て、国立タマサート大学という有名校で、日本語を教える教師となった青年がいます。幼稚園の先生になって幼児教育に携わる者、企業で会計の仕事をする者、そしてタイ北部チェンマイという町にある、小さな教会の牧師夫人となって、活躍している女性もいます。役所から「下層民小路」と名付けられながら、社会では堂々と活躍しています。

それは何より、皆さんの祈りがあり、具体的にリュックを背負って、訪ねて下さった方々の奉仕に、主が答えて下さった結果だと思えます。決して向かい合う出会いではなくて、仲間になって溶け込んで下さいました。それは自分が目立って、存在感が増す奉仕や支援ではありません。むしろ自分が必要とされな いための奉仕や支援です。

ですから「日本人に助けてもらったから」とか、「外国人の力でできた」とか、そういう意識は彼らにはありません。イエス様を信じる自分達には、これだけの事ができた。イエス様がこんなにして下さった、と信仰の胸を張るのです。小さなスラムの小さな教会ですが、名前の通り、神の大きな祝福を、心から賛美する群れとなっています。その彼らに幾らかでも関わる事ができた事を、皆さんも主にあって感謝する事ができると思います。また自分を消して、キリストを示す奉仕ができた、胸を張る事ができるのではないかと思います。

その一方で、バンコクには邦人もたくさんいます。日本の外務省の調査によると、現在約5万人強の在留日本人がいるとの事です。日本の経済事情もあるのでしょう。喫緊の2年間で約1万人が減少したそうです。それでも国外在住者は、第一位のアメリカ・ロサンゼルスに次ぐ、第二位の人数です。企業や様々な組織から遣わされた人、現地採用を求めて自分から来た人、留学生、結婚でタイに来た人、その他、事情は様々ですが、世界第二位を誇る5万人強の日本人が在住しています。何とつくばみらい市とほぼ同じ人口です。調べてみると、つくばみらいには教会が三つ四つあるよ

うです。それなら5万人強在住するバンコクに、日本語の教会があっても不思議ではないでしょう。勿論、彼らの多くは英語に堪能であり、またタイ語に不自由しない人も多い。けれどもやはり心に届くのは日本語です。

彼らの住まいを尋ねると興味深い。日本は春夏秋冬の四つの季節です。しかしバンコクの季節は三つだけ。それはHot, Hotter, Hottestの三つ。最近日本の夏も暑くなりましたが、兎に角バンコクは一年中暑い。それなのに彼らは熱い緑茶を美味しく飲む。納豆や豆腐を好み、部屋にはわざわざ畳を敷く人もいます。そして玄関には、富士山の絵を飾る。玄関に富士山の絵なんて、よほど富士山好きでもなければ、日本ではまず飾らないでしょう。それなのにバンコクでは富士山の絵を飾る。異文化に暮らすとはそういう事なのだと思います。

だから日本語なのです。英語やタイ語が分かったとしても日本語なのです。それは他の言語が駄目だと言う事ではありません。英語でもタイ語でも良いのです。富士山の絵ではなくて、タイの風景画を飾る人だっています。ただその言葉で聞いた福音が、その人の言葉に翻訳されなければならないと言う事です。普段、生活で使っている言葉、何かを考える時に使う言葉。その言葉に翻訳されなければ、その人の福音にはなっていないのです。だから私達の信仰は、翻訳の信仰と言ってもいいでしょう。その意味から、バンコクの教会では日本語を共通の言葉として用い、日本語によって教会を形成して行く、と言うアイデンティティを持っています。

それで日本語での福音が望まれます。それもそういう社会で生きる人々のための福音です。

日本の教会をバンコクに移植するものではありません。異文化の中で喜びまた悩みながら暮らす彼らのための教会が必要です。

現在ある日本語教会は、日本の教会背景を持ちません。日本の教会が伝道してできた教会ではないのです。現地で暮らす日本人クリスチャンが、タイ語の教会も英語の教会もあるけれど、日本語で礼拝したいという思いから始まった集いです。2~3人のクリスチャンが、自宅でしょう、集まって、日本語で賛美歌を歌い、日本語の聖書を読み、日本語で一緒に祈った。それが日本語教会に発展したのです。ですからそこには日本の教会の背景はありません。ましてや教派教団の関りはありません。まさに主イエスを信じると言う、そのただ一点を大切に集う教会です。それが昨年創立60周年を迎えました。

ですからその働きには超教派を正しく理解できる人が必要です。

また日本語の教会であっても、タイの法律上、タイの教団に所属しなければなりません。それでタイ語が幾らかでも分かる人が必要です。勿論、英語でも良いのですが、そこはやはりタイ語である方が望ましいのです。

そんな事で、第二回目のタイでの奉仕に続いて今回も牧師の招聘を受け、それに応じる事になりました。最初はタイ教会をメインとし、日本語教会はサブでした。とこ

ろが2回目と3回目の今回はその逆です。日本語の教会をメインとして、タイ教会はサブです。いずれにしても、今流行りの二刀流。この二刀流は、もう40年以上前から始まっているのです。

しかしそれは人の能力によりません。その人が持っている福音と言いますか、その人を織りなしている福音が必要なのです。もし文字に書いた聖書の言葉や、知識や教養としての信仰が必要とされるなら、何も人間が苦勞して伝える必要はありません。天使でも何でも出て来て、パッパッとやれば、より確実です。

けれども必要とされているのは、文字に書いた教理の教えではなくて、伝えるその人に理解されている福音です。語るその人を、今の姿に織りなしている福音が必要なのです。

15節にあります。「遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか。『なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は』と書いてあるようにです。」

これはイザヤ書52章からの引用です。束縛からの解放を知らせる人の事を言っています。興味深い事に、足が美しいと言う事です。

私は19歳の時、牧師から手紙を受け取りました。そこには「山口君、神学校に行つて、牧師にならんかね?」とありました。私には悩みがありました。当時、神学生と呼ばれる人が夏休みやクリスマスの時に田舎に帰つて来て活躍します。自分もあんなふうになりたいと思っていましたが、家庭の事情もあつて神学校には行かれません。そこでラジオで伝道するPBA(太平洋放送)で奉仕する事も考えましたが、牧師に相談すると、放送伝道でも、やはり神学校で学んだ人が良いという返事でした。それで自分にはそういう伝道の道はないと思っていました。そう言う事もあつて牧師は手紙の終わりに、お金の事は心配いらない。サポーターがいるから、君の気持ち一つだ。と書いたのでしょうか。お金は心配いらないと言うのですから、もう即断です。しかし東京にある神学校なので、田舎者には別世界です。不安になつて、他に神学校に行くと言う人がいないものかと考えました。青年会で活躍している青年の一人について牧師に聞いてみました。「先生はボクに神学校に行つて牧師になれと言いますが、青年会の彼もどうでしょう?」すると牧師はちょっと考えて「彼か。彼は駄目だな」。あんなに活躍しているのに、彼は駄目だとは。それで「彼はなぜ駄目なのですか?」すると牧師は「彼ね。彼は顔が良すぎる」。確かに彼は今でいうイケメン、美形です。けれども福音を語る事と顔の容姿が関係しているなど、考えてもみない事でした。それにしてもイケメンの彼は駄目だが、私はOK。どう言う事? 牧師は「人の外見ではなくて、その人の持っているキリストの魅力が人を捕らえて行くのだ」と言います。「なるほど。そう言う事か。」何だかうまく丸め込まれた感じがしましたが、確かに聖書は顔ではなくて足だと教える。それも足の長さではない。

足の美しき、そこが勝負どころです。足が美しい。よほどの美脚と言う事でしょう

か。しかし福音を語るのは口です。それなのになぜ良い知らせを伝える人の口は美しいと言わないのでしょうか。福音を語るのは口であって、足が語るわけではないでしょう。そうです。聖書が言う足は、その人の人生を歩いて来た足です。山あり谷ありの様々な所を 潜り抜けて来た足です。だから足とはその人その物の事です。福音に織りなされたその人が必要です。福音によって作られたその人が必要とされています。

3度目の刈と言いますが、私は今年74歳になります。自分が74歳になるなんて考えた事も無かった事ですが、でもそれは現実です。大丈夫ですか？何年ぐらいもちますかね。中には「気は確か？」と言う声まであります。

けれども美しい足として何年も何年も輝くのは、勿論良い事です。しかし、ほんの瞬間であっても、パッと輝く高齢者の足があってもいいではないですか。

そうです。私一人ではない。これは若年から高齢者まで、誰もが美しく輝く足である事の証しなのです。

日本語教会とタイの教会という二刀流。そして日本の国内伝道と世界の宣教に関する日本の教会の二刀流。そこに生きるひとり一人、そしてその二刀流に生きる教会の誰もが、神によって輝く足になると信じます。

私達の主は、そういうひとり一人を美しく輝く足として、益々大きく用いられます。主の期待に応えて行きましょう。15節です。

遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか。「なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は」と書いてあるようにです。